

「構造転換の世界経済と新興経済」に関する一試論

平川均（国士舘大学 21 世紀アジア学部）

報告要旨

今世紀に入って、世界経済の構造変動とそれに伴う新たな制度化が急速に進んでいる。低開発地域であったアジアは今や新興経済へと転換し、世界最大の経済圏を形成するまでになった。制度的にも G20 が国際経済問題を扱うフォーラムとして存在意義は高め、また最近では、アジアインフラ投資銀行（AIIB）が予想を超える設立参加国を得て発足している。こうした世界経済の大きな構造転換の中であって、中国は転換の推進力である。

ところで、グローバル化する経済の中で新興国の発展メカニズムは過去半世紀の間に大きく変化し、巨大な人口を有する国々は嘗てない有利な国際的環境の中にいる。景気動向において目先の短期的変動はもちろん避けられない。しかし、中長期的展望に立つならば、中国をはじめとする新興国はその構造を味方につけて、世界経済の中で発展していると理解できる。それはこれまで注目されてきた低賃金に基づく輸出主導型の発展と言うより、潜在的大市場に向けた新興国を市場とする新たなメカニズムの下での発展である。

これをアジアに焦点を当てて地理的に捉えるならば、時代は日本とアメリカが中心となったアジア太平洋経済の時代から中国や ASEAN、インドの含まれるアジアの時代に、そしてユーラシアの時代への入り口に立っていると断言していいだろう。

本報告では、現在の世界経済をどのように位置づけるべきかを考えながら、アジアの発展で注目された赤松要の研究成果にも触れながら歴史における現代の位置を探り、その構造転換のメカニズムの特徴を考える中から、新たな世界とアジアの経済の行方を検討したい。